

枚違はぬやうに重ね、此折居へ入れわたすことなり、  
香爐戻しは、香を右短尺のごときもの、上におき、次炷出す、次に右の通香二炷にて包紙二枚た  
たみ、折居へいる、事なり、但多人數ならば折居不用、小包二枚々々、  
重れ執筆へ渡す、執筆直に記録へ寫す、

客は初に聞の下書いだしをき、一度々々に我おもふ方へ點かくべし、左右同じ様におもは、持  
と書べし、各濟て筆者より硯ふた出す、銘々聞を此ふたに載せ、重硯とも次々え廻す事常のごと  
し、香本はたきから入建香爐を亂宮へおさめ、一禮して仕舞なり、

執筆は記録に認連衆へ廻し、まわり返れば文臺にをき、判判者の前え持參すべし、文臺の上には  
奉書延し置、其上に記録を載せ出す、判者請取文臺は筆者へ返し、亂座になり、其上にて判を認る  
も有、翌日にも認、判者右の奉書に記録の順をうつし、夫に判を書也、又亂座の後判者を上座にし  
て、連座左右へ二行に居、第一の香主より懷中香疊の短尺一枚出し、判を書給へといふ心にて出  
す、各如斯、判者請取置、あとにて其儘返すなり、短尺出す事古實なり、殿記に疊、此短尺等寸法有、勝手に大火鉢  
に埋火置、能時分炭團をおこし、香爐の火を取替べし、

後の香合に百廿種貳百種の香も被出たり、六十種におとらぬもあれば面白式なり、本書にて考  
べし、

〔五月雨日記〕六番香合判衆儀判、詞後日准  
后（足利義政）書之、

一番 左 勝

とこの月

右

山えた水

左右香のにはひよろし、すがりもあしからず、おなじ程にきこえ侍るよし、左右の方人申之、左